

在宅勤務と高齢者介護 悩む両立

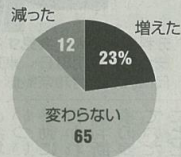
介護とわたしたち

コロナ禍のなかで②

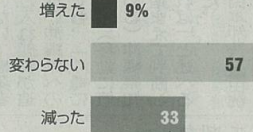


自宅で作事をする長田寛子さん(左)。母のヨネさんが「パソコンに興味を示してさわたりたそうにするのを制することもある」

新型コロナウイルスの影響で介護にかける時間が増えた人も 現在介護中の800人が回答



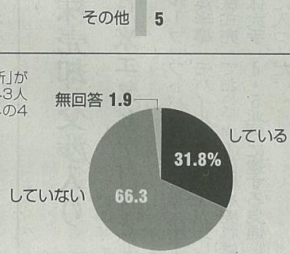
新型コロナウイルスの感染拡大で介護サービスの利用を減らした人が3割 サービスを利用しながら、介護している422人が回答(四捨五入の関係で100%にならない)



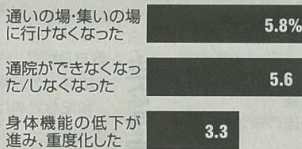
介護サービスの利用頻度が減った理由 サービスの利用頻度が「減った」「少し減った」を選んだ140人が複数回答

※一般社団法人「人とまちづくり研究所」が5月12～18日にケアマネジャー1243人から回答を得た。居宅介護のケアマネの4月の担当利用者数は3万7113人

居宅介護サービス利用者への虐待やDVを警戒しているか



2～4月の居宅介護サービスの利用者が、新型コロナウイルスを受けた影響(影響があると答えた割合が)高かった上位3つ



オンラインセミナーを開く「となりのかいご」の川内現代代表理事＝本人提供



7月中旬、都内の自宅で作事中の社員、長田寛子さん(36)の業務用スマートフォンにメールの受信通知が表示された。隣にいた母のヨネさん(76)が手をのほしてさわたりたそうにするが、「ごめんね。大事なメールだから」と、母の手をとめた。アルツハイマー型認知症の母と兄弟と同居する長田さんは、都内のソフトウェア会社で派遣社員として働く。幹部社員の予定の調整などが主な業務だ。全社員が在宅勤務になった3月以降、母がテイクサービスに行くと長田さんが1人になる時間帯は仕事に集中。午後5時ごろ母が帰宅した後は、母のトイレや水分補給を気遣いながら仕事を続ける。

7月から兄の家に移り住んで3人で暮らすようになった。夜や休日は介護を分担でき、気が楽になった。ただ、兄は基本的に毎日出勤。日中、母が家にいる時の食事をトイシ、介護は長田さんが担当。都内で感染者が増えていることに不安を感じている。「私や家族が感染する心配もあるけれど、感染拡大の影響でデイが休業になってしまったら、一日母と過ごして仕事ができなくなる」と。

4～5月もテイクサービスは変わらず週5日利用できたが、感染防止として時間が短くなり、午後3時ごろには帰ってきた。夕方にウェブ会議に参加していた時、ふいに母に声をかけられて会議の内容が聞き取れず、じやじやした気持ちもある。

在宅勤務になったことにより、住居の通約もなくなった。以前は朝、母を送り出して職場に向かい、帰るも母が帰ってくるの間に合うように急いで帰宅していた。「長く働けるようになって、任せられる仕事も増えた」という。

長田さんは仕事と介護の両立に悩み、今までに3度、転職を経験した。通勤をよくなるように変わった母は、2015年12月に認知症の診断を受けた。その頃から、母は洗濯機の使い方がわからなくなった。お風呂を浴びたきり、心配した長田さんは、気を付けてほしいことを書いた母宛のメモを家中に貼った。出勤前のそうした作業で遅刻が増え、勤務態度を理由に16年夏に契約を打ち切られた。

その後、今の会社で働いていた19年6月、人員削減を理由に会社が退職者を募った際に退社することになった。「人手を減らす中、介護しながら働いて自分が職場に残ってはいけないうような気がした」という。

別の会社で働いていたが、かつての上司から「もう一度一緒に働かないか」と声がかかり、今年1月、今の会社に復帰した。元々の経験を生かし、仕事もやりがいが出てきた。気持ちに余裕が生まれ、家族がそろって暮らすことがよくなった。

母は穏やかに過ごしている。会社は年内、在宅勤務の方針だ。家族を介護する同僚はいないが、「在宅勤務になっても、小さい子どもがいる同僚とは状況が近いと感じ、共感しあっています」。

都内の大学教員の女性(60)も、春から在宅勤務になった。自宅の仕事部屋でオンライン授業

7月22日夜、NPO法人「となりのかいご」と題したオンラインセミナーがスタートした。35人が参加し、川内現代代表理事(40)が「新型コロナウイルスの拡大で、どんな不安がありますか。チャットに書き込んでみてください」と呼びかけると、「自分が感染したら、高齢の親にうつしてしまうことが怖い」など、続々と悩みが書き込まれた。

今、川内さんが懸念するのは高齢者虐待だ。自宅にいた時間が長くなり、家族で介護を抱え込みやすい環境が生まれた。在宅勤務になり、親のヘルパー利用を断った相談者から、「だんだん負担になり、親とも言い合いになってしまっている」と打ち明けられた。中には、虐待リスクを懸念した川内さんから、同居解消を提案した人もいた。

新型コロナウイルスをきっかけに介護を自分自身で全部やるかと思うことに、そもそも無理がある。介護者自身がイライラするような環境には身を置かないで」と助言する。

川内さんは新型コロナウイルスの感染が広がった2月末以降、約1300件の個別相談を受け付けてきた。相談者のうち介護が必要な人との同居は1割だったが、困難な状況に陥っている人が多いと指摘する。また、コロナによって高齢の親の生活や介護を意識し始めた人が増えた。と川内さんは感じている。別居の人は、感染を防ぐために親に会いに行くことを控えてストレスを抱えているケースも多い。

在宅勤務をきっかけに、介護職に踏み切ろうとする人もいた。両親が遠方に住む男性が、在宅勤務になり実家に戻った。親が想像以上に衰えた姿を見て、「会社を辞めて介護をする」と言い出した。川内さんや動機先の説得で退職は思いとどまり、休職して介護することにしたという。

相談者の多くに、「親孝行とは直接介護すること」という感覚が根底にあると分析する。だが、川内さんは、子どもなど家族だけで親の介護を抱えるべきではないと断言する。「本当に必要なものは、安心できる介護態勢を整えること。直接の介護はテイクサービスやヘルパーなど『プロ』に任せて、家族は穏やかな気持ちで親に愛情深くかわって欲しい」と話す。

オンライン授業 合間に見守り

オンライン授業 合間に見守り

虐待リスク懸念 安心な態勢を

在宅勤務をきっかけに、介護職に踏み切ろうとする人もいた。両親が遠方に住む男性が、在宅勤務になり実家に戻った。親が想像以上に衰えた姿を見て、「会社を辞めて介護をする」と言い出した。川内さんや動機先の説得で退職は思いとどまり、休職して介護することにしたという。

相談者の多くに、「親孝行とは直接介護すること」という感覚が根底にあると分析する。だが、川内さんは、子どもなど家族だけで親の介護を抱えるべきではないと断言する。「本当に必要なものは、安心できる介護態勢を整えること。直接の介護はテイクサービスやヘルパーなど『プロ』に任せて、家族は穏やかな気持ちで親に愛情深くかわって欲しい」と話す。

川内さんは新型コロナウイルスの感染が広がった2月末以降、約1300件の個別相談を受け付けてきた。相談者のうち介護が必要な人との同居は1割だったが、困難な状況に陥っている人が多いと指摘する。また、コロナによって高齢の親の生活や介護を意識し始めた人が増えた。と川内さんは感じている。別居の人は、感染を防ぐために親に会いに行くことを控えてストレスを抱えているケースも多い。

在宅勤務をきっかけに、介護職に踏み切ろうとする人もいた。両親が遠方に住む男性が、在宅勤務になり実家に戻った。親が想像以上に衰えた姿を見て、「会社を辞めて介護をする」と言い出した。川内さんや動機先の説得で退職は思いとどまり、休職して介護することにしたという。

相談者の多くに、「親孝行とは直接介護すること」という感覚が根底にあると分析する。だが、川内さんは、子どもなど家族だけで親の介護を抱えるべきではないと断言する。「本当に必要なものは、安心できる介護態勢を整えること。直接の介護はテイクサービスやヘルパーなど『プロ』に任せて、家族は穏やかな気持ちで親に愛情深くかわって欲しい」と話す。

川内さんは新型コロナウイルスの感染が広がった2月末以降、約1300件の個別相談を受け付けてきた。相談者のうち介護が必要な人との同居は1割だったが、困難な状況に陥っている人が多いと指摘する。また、コロナによって高齢の親の生活や介護を意識し始めた人が増えた。と川内さんは感じている。別居の人は、感染を防ぐために親に会いに行くことを控えてストレスを抱えているケースも多い。

新型コロナウイルスの影響で、企業などでは在宅勤務が広がった。高齢の親を介護しながら働く人は、自宅で仕事をしつつ介護もする難しさに直面している。介護サービスの利用を控えて家族の負担が増えるケースも出てくる。仕事と介護の両立を支援する団体は、コロナ禍の中で介護離職や高齢者虐待が増えることを防ごうと相談態勢を強化する。(畑山敦子、及川綾子)